

3/5 苦難を乗り越え販売を再開 原木シイタケ

原木シイタケ販売会（一関農林振興センター主催）は3月5日、道の駅かわさきで行われました。

国が定める基準をクリアして、出荷制限を解除された生産者らが販売を再開。原木シイタケの産地再生を目指し、訪れた人たちに安全とおいしさを強調しました。

当日は、生シイタケ、乾シイタケともに好調な売れ行き。準備した試食も終了時間を待たずになくなり、生産者たちは胸をなでおろしていました。

花泉町の生産者・佐藤三喜雄さんは「やっと販売にこぎつけた。長い道のりだった」と感慨深げに話します。

全国有数のシイタケ生産県の岩手で、当市は主力産地の一つでした。しかし、2012年4月、国から当市産乾シイタケの出荷制限指示が、同年7月には、ほだ木（原木にキノコの菌を植えたもの）の使用制限

指示が出されました。

市が原発事故後、355人いた生産者に対して行った調査では、約7割が生産を再開しないと答えるなど大打撃を受けました。

県は12年10月に「出荷制限地域でも県の実施要領に基づき生産し、放射性物質の基準値を下回れば国に個別解除の要請を行う」という方針を提示。これを受け生産者は、手塩にかけて育てたほだ木271万本を処分。再生産に向けて、ほだ場（ほだ木を並べる場所）を繰り返し除染しました。

そのかきもあって、市に出された国の出荷制限は、施設栽培が2013年12月に解除、露地栽培は15年4月から一部が解除されています。

現在43人の生産者のうち施設栽培10人、露地栽培9人、施設と露地で栽培している6人、合わせて25人が出荷を再開しています。

興田中3年生は、「地元を愛すること」を地元の復興支援に位置づけ、生徒が撮影した写真と思いを載せたポスターを作成しました。また、出荷制限などを受けている地元の特産品・原木シイタケについて学んだり、シイタケを使ったレシピを考案。安全・安心とおいしさをPRする活動を行っています。

同校では、震災の教訓や防災への意識を高めるため、2012年から震災学習と防災教育を開始。沿岸被災地を訪ねて、復興支援などを行っています。28年度は、デザインしたシイタケなどのゆるキャラでマスクングテープを作成。東京都のアンテナショップで販売する予定です。

3年生が作成したポスター。地域の復興を願って作られた



3/11 地元中学生が自慢の特産品を対外的にPR



ライフラインの断絶、家屋の倒壊や放射性物質による汚染問題など当市にも甚大な被害を及ぼした東日本大震災。

あの日から5年が過ぎました。

津波により甚大な被害を受けた沿岸被災地。

未曾有の大震災は、当市にも大きな爪痕を残しました。

5年がたった今、求められることは震災を「運命」だったと過去の出来事にするのではなく、「教訓」として未来へ生かすこと。

3月11日は「犠牲者の冥福を祈り、復興を願う日」、そして「震災と向き合い、未来のために何ができるかを考える日」です。各地で行われたイベントをレポートし、あの日を振り返ります。



1_苦難を乗り越え販売再開。地元産のシイタケを待ちわびていたという声も多かった/
2_試食で折り紙付きのうまさをPR/
3_「続けて良かった」生産者の目には熱いものが/
4_これからも「いわての原木しいたけ」として販売に力を入れる

決して諦めず、地道に取り組みことで、内陸にも復興のつち音が響き始めました。一方で、稲わらや牧草などの農林業系汚染廃棄物の保管・処理、山菜やきのこ類の出荷制限など、未解決の課題も山積んでいます。

それでも、シイタケ生産者は諦めませんでした。逆境に立ち向かうため、生産者と関係機関・団体が丸になりました。試験栽培、除染を繰り返すし、ついに基準をクリアするシイタケを栽培。施設栽培は13年12月から、露地栽培は15年4月から一部が解除されています。

内陸に響く復興のつち音 原発事故による放射性物質汚染の影響で、大打撃を受けた品目があります。原木シイタケです。

2012年4月、国から当市産乾シイタケに出荷制限指示が、同年7月にはほだ木に使用制限指示が出されました。当市では、ほだ木約271万本を処分。生産者は激減し、産地の再生は困難だといわれました。

それでも、シイタケ生産者は諦めませんでした。逆境に立ち向かうため、生産者と関係機関・団体が丸になりました。試験栽培、除染を繰り返すし、ついに基準をクリアするシイタケを栽培。施設栽培は13年12月から、露地栽培は15年4月から一部が解除されています。

また、東京電力福島第一原子力発電所事故に起因した放射性物質は、農林業などに甚大な被害を与えました。市は、今もなお、放射線という「見えない恐怖」から安心を取り戻すため、さまざまな取り組みを進めています。

東日本大震災は、市民の心と生活に、大きな爪痕と消せない記憶を刻みつけました。

市内は本震で震度6弱の揺れを観測。強い揺れでライフラインは寸断され、停電の回復に5日、断水の解消に13日かかりました。道路被害も多発。供給が途絶えたガソリンや灯油などの燃料も不足しました。

生活がようやく落ち着きを取り戻しつつあった4月7日、再び震度6弱の地震が発生。市内は再び停電・断水に見舞われ、相次ぐ強い揺れで多数の住家被害がありました。

また、東京電力福島第一原子力発電所事故に起因した放射性物質は、農林業などに甚大な被害を与えました。市は、今もなお、放射線という「見えない恐怖」から安心を取り戻すため、さまざまな取り組みを進めています。

3/11 3月11日追悼夢あかり 祈りと思いを夢あかりに託して

東日本大震災の発生から5年を迎える3月11日「追悼夢あかり一関」（同実行委員会主催）は、市役所本庁前の噴水広場で行われ、市内外から約350人が犠牲者の冥福を祈り、被災地の早期復興を願いました。

参加者は阪神・淡路大震災で被災した神戸市の「神戸希望の灯り」を、「3・11」の形に並べた夢あかりに点灯。復興を願ったり、被災者を励ましたりするメッセージが描かれた約400個の夢あかりが辺りを照らしました。

当日は平泉学童保育「すぎのこくら

ブ」の児童と一関修紅高音楽部員が復興支援ソングを合唱。津田幸男さんがオカリナを演奏し、人々の心を癒やしました。

一関修紅高の志羅山ひかりさん（2年）は「記憶を風化させないように支援活動を続けたい」と震災復興に思いを寄せ、初めて参加した山目町の加藤由美子さん（45）と麗央ちゃん（5）親子は「震災で地域の絆の大切さを実感した。復興はまだまだ。これからも被災地を応援していきたい」と被災地にエールを送りました。

